

田中誠之先生を偲ぶ

1926年2月東京府東京市本郷区に生まれる。明星中学校、成蹊高等学校を経て1947年4月東京帝国大学第二工学部応用化学科入学。1950年3月東京大学卒業、同年4月東京大学第一工学部大学院入学、同年10月東京大学工学部助手。1958年8月東京大学工学博士。1959年5月東京大学工学部講師、1962年12月同助教授。1965年3月～1966年10月米国アイオワ州立大学V. A. Vassel教授の元で博士研究員として研究に従事。1973年5月東京大学教授。1975年日本分析化学会学会賞受賞。1986年3月東京大学定年退官、同年5月東京大学名誉教授。同年4月明星大学理工学部教授、日本化学会学会賞受賞。1989年日本分析化学会会長。1995年6月明星大学理工学部長。1996年4月～1998年3月明星大学学長。2007年11月瑞宝中綬章授与。

2026年3月9日に本会会長を務められた名誉会員の田中誠之先生が100才でご逝去されました。ご葬儀は3月15日に家族葬で執り行われましたが東京大学やいわき明星大学の関係者も数名参列し、お孫さんたちによる弔辞や葬奏の曲など、しめやかな中にも温かみのあるお見送りでありました。ここに謹んで哀悼の意をささげると共に、先生のご経歴やご業績を紹介しつつ生前のご様子を偲ばさせていただきます。

先生は第二次世界大戦中に勤労奉仕の日々の高校生活を送られた後、1947年に西千葉（現在の千葉大学）にあった東京帝国大学第二工学部に入学され、卒業論文では高橋武雄教授に指導を仰がれた。1950年4月東京大学第一工学部大学院入学後工業分析化学講座の宗宮尚行教授に師事され、同年10月に助手に採用され、同時期に工学部総合試験所127号室に設置された本邦初の輸入品Baird B型自記式赤外分光光度計の保守管理・測定を担当された。これが先生の分子分光法による有機機器分析への道の出発点になった。今では汎用分析機器となっている赤外分光計であるが、当時は我が国に先生ご担当の一台しかなく、学内のみならず学外にも広く利用の門戸を広げ、2～3年間は全国からの年間千件を越す依頼分析を先生が一手にさばかれていた。先生は、依頼分析を行いながら赤外分光法による定量分析法を開発して応用分野の拡大に努められ、その成果により1960年日本化学会進歩賞を受賞された。その後も赤外分光法の高分子分析やコールタール成分分析への応用などの研究を展開され、1975年に日本分析化学会賞、1986年に日本化学会賞を受賞された。また、先生は1986年から3か年間、文部科学省特定領域研究「高性能化学センサシステムによる化学計測」の研究代表者を務められ、高機能センサ素子材料、新検出方式、高性能イオン・ガスセンサ開発、高感度バイオセンサ開発、知能システム化研究の5研究班計63名を組織されて、分析化学の発展に尽力された。東京大学ご退官後は明星大学にて研究・教育を継続されると共に学部長、学長として明星大学の運



営に貢献された。1950年代の総合試験所時代、多くの企業の研究者が派遣研究生として先生のもとに集い、共同研究を行うと共に研究会を開催するようになった。1955年に研究会は総合試験所の部屋番号から127会と名付けられて発足し、先生を中心とした講習会や講演会活動を通じて赤外分光分析法の各分野への応用と普及が進められた。産学連携のはしりと言える。先生が東京大学ご退官後明星大学に移られてからも127会は活動を継続し、毎年セミナーが開催されてきた。

さて私の卒業論文の研究室配属時、東京大学工学部応用化学コースには無機工業分析化学講座、有機工業分析化学講座、機器工業分析化学講座の三研究室があり、それぞれ鎌田仁教授、田中誠之助教授（当時）、仁木栄次教授が担当されていた。有機化学に惹かれていた私は田中先生に師事することとなったが、学部から博士課程修了までの私の研究テーマは先生のご専門とは離れた磁気円二色性に関する研究であった。研究報告会は3研究室合同で開催され、各学生の発表に対して若手教官から多くの鋭い質問が寄せられ、研究を多角的視点でとらえることを学んだ。教授の先生方が質問されることは少なかったように記憶しているが、田中先生の口癖は「御利益は何ですか？」であった。全国からの依頼分析を担当された経験や企業関係者との127会の関係を通じて実学的有用性を重んじられたものと拝察する。私の学生時代、年始の挨拶に教職員学生一同で田中先生の御自宅に伺うのが恒例であった。年始会の前に応接間で先生と学生とで一緒に麻雀を楽しむのも恒例であった。当時のことゆえ学生の多くは喫煙者であり、灰皿に山盛りになった吸殻を見て、後片付けに御苦勞されるであろう奥様に申し訳なく思った記憶も残っている。田中先生は最近までご友人との麻雀を楽しまれていたとご家族に伺ったが数十年前の年始会と重なって先生を思い偲ぶこととなった。

田中先生、どうぞ安らかに眠りください。

〔東北大学名誉教授 寺前 紀夫〕